

平安京の井戸

—木枠で井戸をつくる—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



覆屋のある円形縦板組の井戸 (中京区壬生朱雀町・朱雀第一小学校)



方形縦板組の井戸 (右京区西院西今田町)
底に曲物を据える。下は断面のようす。

西寺跡の方形横板組の井戸 (南区唐橋西寺町)
横板を方形に組み、上下をほぞで固定する。

京都市内の発掘調査では、いたるところで井戸が検出される。井戸は、地中深く掘り下げられるため後世の破壊を受けることも少なく、各時代のものが比較的よく残っている。単純に素掘りの井戸もあるが、多くは木や石を用いて壁面の崩落を防ぐ工夫がなされている。そして、これらの井戸の形態は時代によっても変化する。

長岡京期や平安時代は木枠の井戸が多く、これはその後も各時代

にみられる。そして、平安時代末期に石組みや瓦積みの井戸がつけられるようになる。鎌倉時代以後は石組み井戸が主流であるが、なかには曲物や桶を数段積み重ねた井戸もある。ここでは平安時代前期の木枠の井戸についてふれ、平安京に暮らす人々の生活の一端をみてみよう。

平安時代には、木材を加工し巧みな技術を駆使して、さまざまな種類の井戸がつけられた。最も一

般的なのは、一辺1m前後の方形に組んだ木枠と四隅の支柱を骨組みとして、周囲を縦板で囲んだ「方形縦板組」の井戸である。

次に縦板を円形に組んだ井戸がある。これは、木枠を組んだ時に平面形がきれいな円形となるように、断面を台形に加工した縦板を15～30枚程度用いてつくられている。木枠を円形に組むのは土圧に耐える、より強固なものとするための工夫であろう。また、この

種の井戸には覆屋おおいやをともなうものがあるのも注目される。

このほか、横板を方形に組んだ井戸がある。4枚の板の端部に切り込みを入れ方形に組み、これを数段重ねるもので、大型の井戸に用いられた。なかでも西寺跡で検出したものは、一辺が2.4mもある巨大な井戸であった。

これらを比較すると、「方形縦板組」の井戸が圧倒的に多く、木枠の組み方や縦板の枚数などにより、さまざまなバリエーションもみられる。木枠と適当な板材があれば比較的容易につくることができたと考えられ、転用材も多く用いられた。

これに対し「円形縦板組」や「方形横板組」の井戸が少ないのは構造上かなり高度な技術と限定された材を必要とした特殊な井戸であったからではないだろうか。

実際には、どの程度の規模の宅地にどの種の井戸が採用されたかは、発掘調査でもほとんどの場合わからない。しかし、「円形縦板組」の井戸が覆屋を持ち、園地や寝殿造りとともなう邸宅跡で検出されていることや、「方形横板組」の井戸が大型で、官寺である西寺で用いられていることからその特殊性がうかがわれる。平安宮内ではこれまでに井戸の検出例はないが、西寺のような横板組の大型井戸がつくられたのかもしれない。平安時代前期には、井戸にも格式があったようである。

ただし、人々が常にきれいな水を欲したのはいずれの場合も同じであったのだろう。そうした願いを込めてか、井戸からは祭祀さいしに係る遺物がしばしば出土する。また、底部には水の浄化を保つために礫れきや板を敷き、あるいは湧水わきみず

を効率的にくみ上げ一定の水量を保つために、曲物を据えるといった工夫もなされた。

ところで、発掘調査で確認できるのは井戸の内部構造のみで、実際に人々がどのようにして水をくみ上げ、使用していたのかはわからない。ここで絵巻物を見ると、井戸を囲む人々の様子が、実に生き生きと描かれている。曲物かまに水をくんで個々の家に持ち帰り、甕などに貯めて利用したのだろう。井戸に集まる人々は、日課である水くみをしながら時には炊事の間も忘れて、談笑したかもしれない。生活に欠くことのできない水を供給する井戸を介しての「井戸端会議」という言葉も、こうした光景を想像すれば実に微笑ましく、人々の生活に密着した井戸の様子をよく表しているといえよう。(近藤知子)



井戸端の風景

曲物を手に水くみに訪れた女たち。その場で水を飲む者もいる。『模本 扇面写経下絵』竹内鳴鳳画（京都市立芸術大学芸術資料館蔵）